

2024(令和6)年度埼玉県・オハイオ州スカラシップ

〈語学・大学留学コース〉

“Connection”：最終報告レポート

2024(令和6)年度奨学生 福澤 心結

こんにちは。6か月という時間があっという間に過ぎ去り、自分でも驚いています。帰国後「留学はどうだった？」と聞かれることが多いのですが、毎回返答に少し迷ってしまいます。というのも、一言ではとても語り尽くせないほど、内容の濃い6か月間だったからです。勉強に加えて、さまざまな活動や遊びも全力で取り組み、毎日が充実感で溢れる日々を送ることが出来ました。この留学は、私の人生において決して忘れることのできない、経験の一つになりました。

今回のレポートでは、5月で最も印象に残っている一日、コロンバスでのジョブシャドウイング・表敬訪問、帰国前の旅行、そして留学を通して得たことについてまとめます。長くなってしまったのですが、興味のある方は、お付き合いいただけると嬉しいです。

5月2日は、春学期最後の授業日であり、さまざまなイベントが重なった、特別な一日でした。まず、授業後に大学で開催されたのは、The Peer Mentor Program 主催の「Spring Carnival」という大規模なイベントでした。キャンパスには大きなバルーンが登場し、各ブースではゲームを楽しんだり、無料の飲食が提供されたりと、活気に満ちていました。さらに、先着順でぬいぐるみがもらえるなど、学生にとって嬉しい企画が盛りだくさんでした。

このような学内イベントが日常的に行われるのは、日本の大学との大きな違いだと感じました。体を動かしてリフレッシュできるだけでなく、友人との交流や新しい出会いの場にもなっており、学問だけの役割にとどまらない、大学の側面に魅力を感じていました。また、夕方には、川村先生がさよならパーティーを開催してくれました。そこでは、ピザなどの食べ物を食べながら、日本語学習者は日本語で、英語学習者は英語でスピーチをし、また、インターナショナルナイトで披露したダンスをもう一度踊り、いよいよ学期が終わってしまう実感が沸いて寂しい気持ちでいっぱいでした。その夜は友人の家に集まり、日本文化の一つであるカラオケをし、さまざまな国の曲を歌って踊りました。この一日が終わらなければいいのにと感じていました。



○総領事と会食

福井県の奨学生や過去に同じスカラシップ（OSUS）を受けた先輩方2名、そして川村先生と共に、デトロイト総領事と日本食を囲む食事会に参加する機会をいただきました。総領事はご自身の経歴や仕事内容について、とてもフレンドリーに貴重なお話をしてくださいました。また、食事会にフィンドレー市長も参加してくださり、総領事と市長を前に大変緊張しましたが、貴重な経験となりました。



○ジョブシャドウイング

5月13日から15日の3日間、ジョブシャドウイングと表敬訪問のためにコロンバスに滞在しました。初日は、Ohio Department of Higher Education（オハイオ州高等教育局）で、post-secondary globalization liaison（高等教育の国際連携担当者）として勤務する Kevin Holtsberr さんからお話を伺いました。特に印象的だったのは、オハイオ州が州政府全体で K-12（幼稚園から高校）から博士課程（PhD）まで一貫したキャリア教育を整備していることです。例えば、「College Credit Plus」という制度により、高校生が大学レベルの授業を履修して単位を取得できるほか、インターンシップや職業体験の機会も提供されています。これは、学生のキャリア支援にとどまらず、州内の労働力強化や企業誘致、経済成長を促進し、州民の生活の質や経済的安定につながるという考えに基づいています。教育と経済が密接に連携した取り組みを、現場で働く方から直接聞いたことは大変貴重な経験でした。

次に、Ohio Department of Education and Workforce（オハイオ州教育・労働省）で World Languages（外国語教育）プログラムの専門官である Ryan Wertz 氏と面会しました。私がフィンドレー大学について発表した後、アメリカと日本の教育現場について意見交換を行いました。特に印象的だったのは、アメリカには毎年5月に「Teacher Appreciation Week（教師感謝週間）」という文化があることです。教師の努力と貢献を社会全体で称える一週間で、学校や地域で感謝のメッセージやプレゼントが贈られています。Wertz 氏は、こうした文化が、アメリカでも深刻化している教師不足の課題に対して、少しでも教師のモチベーション向上や離職防止につながっているのではないかと語っていました。また、彼は外国語教育の専門家であることから、効率的な言語習得法についてもお話ししました。

その後、オハイオ州開発局（Ohio Department of Development）の国際部門を訪問しまし

た。そこでは、「プログラム・コーディネーター (Program Coordinator)」の Macey Heslet 氏、「輸出奨励管理者 (Export Incentives Administrator)」の Courtney West 氏、「国際業務マネージャー (Manager, International Affairs)」の Tobias Engel 氏と話す機会もいただきました。オハイオ州開発局は州内の経済成長を促進する支援を行う政府機関で、仕事内容に加え、日本とアメリカの就職活動の違いや、国際ビジネスにおける心構えについて学びました。特に「国際ビジネスはダイナミックで変化が速く、文化理解と柔軟性が重要」という姿勢が印象的でした。



2 日目は State House(州議事堂)を見学し、その後、オハイオ州開発庁の長官 Lydia Mihalik 氏に留学で学んだことをプレゼンテーションする機会をいただきました。彼女は前職でフィンドレー市の市長も務めており、非常に緊張しましたが、全力を尽くすことができました。Mihalik 氏は、若くして市長に選ばれた当初の不安や、経験を積むことで徐々に物事がうまくいくようになったことを話してくださいました。現在もなお、女性の社会進出には課題が残るなかで、政治や行政の重要な役職を務めながら、家庭や子育ても両立されており、その姿は私にとってまさに憧れの女性です。温かく柔らかな雰囲気の中で聡明に話す姿に強く感銘を受けました。

その後、City Hall (市庁舎)を見学しました。Mayor's Office (市長室)の Regional Partnership Director (地域連携ディレクター)である Mike Schadek 氏が丁寧に案内して下さり、ギフトまでいただきました。施設内では、多様性が進んでいる実例を踏まえ、人種や性別に関わらず誰もが活躍できる環境について説明をしてくださいました。次に訪れたのは「Center of Science and Industry (COSI)」です。COSI の館内には 300 以上の体験型 (Hands-on) 展示があり、科学・技術・工学・芸術・数学 (STEAM) を実際に手を動かして学べます。職員の方が館内を案内して下さり、来館していた子どもたちが目をキラキラさせながら、展示に夢中になる様子も見ることができました。特に「水」をテーマにした展示エリアがお気に入り、テーマパークのような演出の中で水の循環や圧力、流れについて自然に学べる空間でした。遊びと学びが融合しており、将来子どもができればぜひ連れて行きたいと思いました。

COSI は「誰もが科学に触れられる場」として、地域に根ざしながら、教育・文化拠点として大きな役割を果たしていると感じました。



3 日目はオハイオ州立大学を見学し、上級講師の清末哲平先生にお会いしました。その後、Mitchell B. Lerner 教授と福森尚美准教授とコーヒーを飲みながらお話ししました。フィンドレー大学のキャンパス規模にも驚きましたが、オハイオ州立大学のキャンパスはそれをはるかに超え、まるで町全体が大学のようなものでした。留学中、アメリカではボランティア活動が日本よりもはるかに生活に根付いているという点が印象的だったため、そのことをお話ししていると、Mitchell 教授はネブラスカ出身で、子どもの頃から学校や教会などを通じて自然にボランティア活動に参加する文化があったと話していました。また、オハイオ州立大学では「エミネンス・フェローズ (Eminence Fellows)」という、非常に競争率の高いスカラシッププログラムが存在するそうで、このプログラムは、学業成績だけでなく、リーダーシップや社会貢献への意欲を持つ学生を対象とし、4 年間の奨学金が支給されるものです。たとえば、視覚障がい者向けにレストランのメニューを見やすくしたり、病院における医療通訳制度を構築したりといった、実際の社会課題に即した取り組みが行われていたそうです。こうした話を通じて、アメリカの大学生にとって、ボランティアや地域貢献が「特別なこと」ではなく「日常の延長」にあることを強く感じました。日本においても、こうした活動がもっと身近になる仕組みや文化が必要なのではないかと考えさせられました。

この3日間のジョブシャドウイングと表敬訪問のコーディネートを担当してくださったのは、オハイオ州開発局 (Ohio Department of Development) で働く Erika Evert さんです。エリカさんは、期間中常に同行してサポートしてくださり、その温かい気遣いと丁寧な対応に深く感謝しています。年齢はそれほど離れていないものの、社会人として活躍されている彼女の落ち着いた振る舞いや責任感には大きな学びがありました。また、日常の会話を通じて日米の文化の違いについても詳しく話す時間が多くあり、日米両国にルーツを持つ彼女の視点から得られた気づきは、自分の国について改めて考え直すきっかけとなりました。

この 3 日間で出会った皆さんはとても温かく迎え入れてくださり、緊張やプレッシャーを感じる場面もありましたが、それ以上に新しい経験へのわくわくと楽しさを感じ、充実した時間を過ごすことができました。また、「働く」ということを真剣に考える良い刺激となりました。



○留学最後の旅行

帰国前に、シカゴとラスベガスを旅行しました。

シカゴには、5 か国それぞれ異なる国籍の友人たちと一緒に訪れました。高層ビル発祥の地とも言われるこの街は、たくさんのビルに囲まれているにもかかわらず、不思議と窮屈さは感じられませんでした。SNSなどでよく目にしていたミレニアムパークの Cloud Gate を実際に見ることができたときは、嬉しかったです。



ラスベガスは帰国の途中に 1 人で訪れた街です。歩いているだけで楽しく、アメリカ国内でも州ごとの雰囲気の違いを強く感じました。ラスベガスは「眠らない街」と言われるだけあり、夜遅くでも街全体が明るく輝いていて、本当にキラキラしていました。街の豪華さや、経済の潤いを肌で感じました。



さらに興味深かったのは、ラスベガス市内の華やかさと、車で少し郊外に出たときのギャップです。煌びやかなホテルやカジノが建ち並ぶ中心街から少し離れると、何もない広大な土地が広がり、遠くに山々の風景が見えてきます。その対比がとても面白かったのを覚えています。友人や家族と行く旅行ももちろん大好きですが、ひとり旅はまた違った魅力があります。自分のペースで動ける自由さがあり、現地の人たちから声をかけられる機会も増えるため、思いがけない出会いや交流も楽しめました。



○留学から得たこと

滞在中、フィンドレーやアメリカの魅力に触れる中で、改めて日本、そして埼玉県の良さにも気づかされました。それと同時に、自分の生まれ育った地域や国の魅力を、もっと世界に向けて発信したいという思いが芽生えました。しかし、そのためにはまず、私自身が日本や埼玉について深く理解していなければなりません。これまで私は、「日本で生まれ育った」というだけで、どこかで“日本を知っているつもり”になっていたことに気づかされました。実際には、自国が直面している社会課題や歴史的背景について十分に理解しておらず、自分の無知を痛感する場面が多くありました。今後は、こうした課題に正面から向き合い、幅広く知識を蓄えたうえで、自分の考えを自分の言葉で発信できるような大人になりたいと強く思います。また、大学生という今だからこそできる経験として、もっと多くの世界を自分の目を見て、体で感じたいと考えるようになりました。そして何より、偏見を持たずに人や物事に向き合う姿勢を常に意識し、異なる価値観や文化を柔軟に受け入れられる人間でありたいと思います。

○言語学習の可能性

近年、翻訳機の進化によって「英語は学ばなくてもよいのではないか」という意見を耳にすることがあります。しかし、私はその考えには賛同できません。なぜなら、言語は単なる情報伝達手段ではなく、気持ちをのせて伝える“コミュニケーション”そのものであり、翻訳を通しては決して再現できない「言葉の重み」があるからです。言語学習は、まるで魔法のようなものだとは私は感じています。言語と文化は密接に結びついており、言葉を学ぶことで、自然とその背景にある価値観や文化も理解することができます。また、たとえ一言であっても相手の言語を使おうとする姿勢は、心の距離を縮める力があると実感しています。もちろん、私自身も翻訳ツールに助けられる場面はありましたが、それでも「自分の言葉」で話すことの大切さを感じる機会が多くありました。大学では TESOL (Teaching English to Speakers of Other Languages／英語を母語としない人への英語教授法) の授業を受講していたこともあり、「なぜ日本人は英語が読めても話せないのか？」という問いについても深く考えることがありました。例えば、日本の就職活動や受験における英語の扱い、また日本語と英語の構造の違い(語順、主語の扱い、曖昧さの度合いなど)が、会話能力の習得を難しくしているのではないかとといった議論もありました。一方で、日本では日本語だけで高等教育を受けることができ、学術論文や情報も豊富に日本語で入手できるほか、社会インフラや娯楽もすべて日本語で完結します。英語ができなくても生きていくうえで困らないというのは、非常に恵まれた環境だということを改めて認識すべきだと感じました。だからこそ、私はこの恵まれた環境に甘んじることなく、自分の語学力をさらに高めていきたいと強く思っています。英語が話せることで、世界は圧倒的に広がります。あるトピックについて、多様な国の人々と、文化の違いを踏まえながら意見を交わす時間は、私にとって何よりも楽しく、学びに満ちた瞬間でした。そしてそのような時間を通じて、最終的には「国籍や文化が違って、みんな同じ人間である」という共通点にたどり着くそんな再認識の瞬間が、私はとても好きです。まだ卒業直後の進路は確定していませんが、現在は小学校から高校までの教員免許取得予定で、大学で学んでいるため、いつかは教師として子どもたちと関わる道に進みたいと考えています。

○最後に

この6か月とても幸せな時間を過ごしました。振り返ってみると、人に恵まれていたことをひしひしと感じています。私と関わってくださった全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。特にフィンドレー大学でできた友人とは、今でもビデオ通話やLINEで連絡を取り合っています。中には日本を訪れる予定の友人もあり、留学中の出会い一つ一つが私にとって大切な宝物です。友人たちはいつも助けてくれ、居場所のように温かい環境を作ってくれました。何気ない会話やボードゲームを楽しむ時間が、忘れられません。

フィンドレー大学はオハイオ州ののどかなところにある私立大学です。オハイオ州と1990年に姉妹都市提携を結んで以来、教育を中心とした交流を続けていて、交流開始当初

は、オハイオ州内の複数の大学が参加していましたが、時代の変化や経済的事情により支援が縮小され、現在まで継続してこのプログラムを支えてくださっているのは、唯一フィンドレー大学のみとなっているそうです。この大学が、埼玉県とオハイオ州を結ぶ懸け橋として、これまで、そしてこれからも果たしていく役割は非常に大きいと感じています。そして、フィンドレー大学の魅力はその歴史や立地だけにとどまらず、教授と学生の距離が近いことや、生徒同士、地域と大学同士のコミュニティを大切にする温かい校風にもあります。

また、アメリカという、日本から遠く離れた土地にあるにもかかわらず、フィンドレー大学には「Japanese Program House」という場があり、そこを起点として日本のコミュニティを広げている川村先生と青木先生のご活動には、尊敬の気持ちが尽きません。素敵なお人達で溢れている、フィンドレー大学の魅力に惹きこまれる学生が、これからもきっとたくさん生まれていくのだと思うと、私までわくわくした気持ちになります。

本当に貴重でかけがえのない経験をさせていただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。



最後まで読んでいただきありがとうございます。今後の奨学生の方や、このプログラムに興味をお持ちの方々に
対して、できる限りのサポートをさせていただきたいと考えております。ご意見やご質問等がございましたら、
mipoko12@outlook.jp までどうぞお気軽にご連絡ください。皆さまからのご連絡をお待ちしております。